

田端信廣『哲学的思惟と詩的思惟のインターフェイス
—フィヒテvsヘルダーリン、ノヴァーリス、Fr. シュレーゲル』
(晃洋書房、2022年)

武 田 利 勝

いま、ドイツ観念論が熱い。とこう書くと、いやいやドイツ「観念論」と呼ぶこと自体間違ってる、なぜならいわゆるドイツ「観念論」を総体として見れば、それは大きく言って、いわゆる「観念論」をいかに克服するか、「観念論」を實在論的に捉えなおすことはいかにして可能かを問う思想潮流だったのだから、もっとニュートラルにドイツ「古典哲学」とするべきだろう、といった声も聞こえてきそうだが、しかしこうしたマニアックな反応も含めて、1800年前後のドイツ語圏に沸き起こった高熱量の哲学的論争への関心が、近年ますます高まりつつある。

例を挙げよう。小規模ながらも高熱量という点にかけては唯一無二、気鋭の出版社の一つとして知られる堀之内出版が数年前に出していた一連の機関誌『ニクス』——そもそもこの魅力的な誌名にしてからがヘーゲル『差異論文』に現れる一節、「絶対者は夜である」を出自としていることは示唆的にすぎる——、その第2号（2015年）が「ドイツ観念論と理性の復権」を特集したことは記憶に新しい。本特集では中堅・若手世代の研究者総勢10余名がヘーゲル、ヘルダーリン、マイモン、ニートハンマー、ヤコービ、フィヒテ、シュリング等々についての高レベルの論考を寄せているのだが、この対象の広がりそのものが、いまドイツ観念論を扱うことの意味を雄弁に物語っている。論述対象のこうした広がりには第一に、もはやドイツ観念論をカントからフィヒテ、次にシュリングに至り、ヘーゲルにおいて完成される、といった単線的な、往年の大河ドラマのような思想潮流と見なすことを無効とする。むしろ、あの大いなる思想の時代は、例えば「理性」、例えば「悟性」といった同一の概念をめぐる、今では埋もれてしまった論客たちも含め、さまざまな個性たちが多様な問題意識のもとに論争し、反目し、あるいは共闘することができた稀有な時代として捉えなおされる必要があるのだ。第二に、そのように見直すことによって始めて、当時の思想的状況が生き生きと立ち上がってくる。いわば博物館のなかに収められてしまっていた観念論的術語の数々が、例えば「同一性と多様性」、例えば「自然と理性」、といった単純な二項対立の枠組みをダイナミックに攪乱させながら、現代の思考に強烈な揺さぶりを掛けてくる。

前世紀の90年代、ドイツ観念論をこのように多種多様な思考が織りなす一種の網の目と捉える新たな方法論、すなわち「布置的研究 (Konstellationsforschung)」を提唱したのは、ヘーゲル研究の泰斗ディーター・ヘンリッヒ氏である（その記念碑的な著作として、Dieter Henrich: *Konstellationen. Probleme und Debatten am Ursprung der idealistischen Philosophie (1789–1795)*. Stuttgart 1991を挙げておかねばならない）。あたかもこれに呼応

するかの如く、わが国では1992年に日本シェリング協会が創設され、これにより、かつては分断状態にあった各領域、すなわち哲学、文学、美学、宗教学の各分野に散らばっていた研究者たちが一堂に会し、1800年前後のドイツ思想を多面的かつ多層的に議論し検討するためのプラットフォームが準備された。上記『ニュクス』の特集も含め、近年コアな学術出版業界をいよいよディープに賑わせているドイツ観念論界限の研究の多くは、何らかのかたちでこのプラットフォームに関わっている。特に、ヘルダーリン、シュレーゲル、ノヴァーリス、さらにヤコービやモーリッツについての最近の優れた研究成果を挙げればそれこそ枚挙にいとまがないわけだが、そのいずれも、ヘンリッヒが示した「布置的研究」の可能性を、それぞれのアプローチを通じて実現させたものだ、と言ってもおそらく言い過ぎではあるまい（なお評者は、まさに本稿準備中の2022年12月某日、ヘンリッヒ氏の訃音に接したばかりである）。

前置きがいささか長くなった。だが以上の前提抜きにしては、本書ほんらいの意義を語ることはできないのだ。何といても本書の著者田端信廣氏は、ドイツ観念論とその時代をめぐる「布置的研究」を牽引する一人なのである。氏の最初の著書『ラインホルト哲学研究序説』（2015年、萌書房）は衝撃だった。本場ドイツならいざ知らず、まさか日本でラインホルトについてのモノグラフが出る日が来ようとは。しかも600頁超、全14章もの浩瀚な著述を通じて、従来はカントの批判哲学とフィヒテの知識学とのあいだにひっそり佇む「根元哲学」の考案者、といった体で、つまりはいぶし銀の脇役扱いだった哲学者の思想形成の全容が、その外的な生と内的な生を襲った数々のドラマとともに、たっぷりと語り尽くされたのだ。それだけではない。著者はラインホルトという新たな視座を一般に供しつつ、1780年代から90年代末までのいわゆる哲学史的主役たち（つまりはカントやフィヒテ）を、新たな布置のもとに捉えなおすべく迫ったのである。

衝撃はそれにとどまらない。2019年、田端氏はさらに『書評誌に見る批判哲学——初期ドイツ観念論の展相』（晃洋書房）を刊行。同書の主役はなんと、1780年代半ばから1800年頃までイエーナに拠点を置いた『一般学芸新聞（ALZ）』、特にその哲学書評である。要するに上記年代に発表された哲学史上の主要著作の数々がどのように受容され、どのような議論を惹起せしめたかを、まさにその当時の、しかも当然のように匿名氏を多く含む有象無象の書評記事を読み解きながら、丹念に辿ってみせたのだ。これこそ「布置的研究」の極北と言っていい。400頁に迫る同書の内容はもちろん、巻末に付された二つの資料（ALZが掲載したイエーナ大学での哲学関連講義の予告、ならびに同紙哲学欄の書評一覧）は、今後この時代の思想的風景を知るために欠かせないものとなるだろう。

そこへもってきて、2022年、本書の出来である。タイトルを見ただけで、その主題は明白だ。ヘルダーリン、ノヴァーリス、Fr. シュレーゲル。岩波文庫で言えば確実に「赤帯」指定のこの三者が、「青帯」組のなかでもとりわけ難物、フィヒテの『知識学』にどのように向き合ったのか。そしてその哲学的対決がそれぞれの詩学にどのような影響を与えたのか。テーマそれ自体と対象領域を見ると著者の前二作に比して拍子抜けするほどオーソドックスな印象だが、しかし本書目次に目を通せば立ちどころに知れるように、そ

うそう一筋縄では行かない。

すなわち全11章からなる本書は、まず第一章でシラーの美的思想の展開を追ったのち、第二章では議論をその美的教育論にフォーカスする。そして次の主役、つまりポスト・シラー世代の最初の大立者としてヘルダーリンが登場。第三章ではイエーナ時代、フィヒテ『知識学』との彼の闘いが、第四章ではフランクフルト時代における「合一哲学」への道筋が、第五章では主要舞台はホンブルクに移り、そこで彼の哲学的修業時代が独自の詩論として完成されるまでが、克明に描写される。第六、七章の主役はノヴァーリス。その前半部は「フィヒテ研究」の批判的検討に、後半部はその帰結としての「百科全書学」構想の内実の検討に充てられる。ラストを飾るのは、Fr. シュレーゲルである。第八章はドレスデン時代、ギリシャ文芸史研究に没頭するシュレーゲルの思考に、後の批評家としての彼を特徴づける一種の解釈学的循環の萌芽が立ち上ってくる様子を、第九章はそれがフィヒテ哲学の批判的受容を通じて「進展的哲学」という様相を呈するにいたるプロセスを、第一〇章は「文献学の哲学」の分析を通じ、彼の哲学を本質的なところで規定する歴史学的契機を、逐一論じていく。最後は1800年末のイエーナ大学講義『超越論的哲学』の分析をもって、ここに全11章が閉じられる。

評者の力量不足のなせるわざ、あまりにも大雑把なまとめ方しかできないのは歯痒いばかりだが、それにしても人は思うだろう——これは、まるで1800年前後の初期観念論の動向を描いた特大地図のようではないか、と。たしかに、地図である。だが本書のそれは、ただの地図ではない。何しろ、著者の前二著を思い出していただきたい。著者は、あの時代のイエーナ周辺の思想的地質学調査を究め尽くしている。だから「地図」と言っても、まず「地」そのものへのこだわりがすでに別次元なのだ。となればそこから生じる「図」もまた然り、ありきたりの図にとどまるわけがない。それは一つひとつのテキストの読みにも当てはまる。

例えば、ヘルダーリンの知識学との格闘を活写する第三章第二節。こうした文脈でしばしば引用されるヘーゲル宛書簡（1795年1月26日付）——『知識学』の聴講者用配布原稿をもとにフィヒテ哲学研究を進めつつある詩人が、この段階での理解のあらましを友人に宛てて開陳した一級資料——がやはりここでも登場する（本書47頁以降）。だが「布置的研究」の達人は、この良く知られた書簡からもまた、未知の側面をあぶり出す。この一通の手紙には、約5か月前にヘルダーリンが記したフィヒテ研究の覚書の一部が差し挟まれている、というのだ。つまりその箇所と他の部分を仔細に比較検討すれば、詩人が研究を始めた当初から5か月間にわたって——もちろん、その間に『知識学』自体も着々と進行している——ヘルダーリンのフィヒテ理解の何が変わり、何が変わらなかったのかが見えてくる、というわけである。いまだ生成途上にある『知識学』と、その研究の端緒にいたばかりのヘルダーリンと、その後のヘルダーリン。この複雑な、三次元的——いや、ここには時間系列も加わっているのだから、むしろ四次元的——座標系のなかに、詩人ヘルダーリンの哲学的定点、いやあるいは、哲学の徒ヘルダーリンの詩学的定点を見極めること。言い換えれば、限りなく複雑な地形・地質調査——それが複雑なのは、いわば空間

のなかに時間を読み込む作業だからである——を経て、限りなく精密な図を描くこと。これこそ本書が示す「布置的研究」の精髓であり、ここでご紹介したのはそのごく一例に過ぎない。

ともあれ、微に入り細を穿つ著者の論述は、一方では重厚な推理小説にも似た高度の知的刺激に溢れているが、一方では、例えばフィヒテ『全知識学の基礎』等についてかなりの予備的理解が無い限り——かく言う評者もその例に漏れない——相当の難物である。一般に、詳細にして複雑を極めた地図というものはおよそ素人向きではないのだから、なおさらだ。そこで最後に、本書全体を貫く導きの糸を確認しておきたい。

本書のタイトルにはその名が無いにもかかわらず、最初の二つの章をシラーが占めていることが、気になった方はおられるだろうか。第一章の冒頭、著者は次の一節で本書を始める——「一七八〇年代末から九〇年代前半までの数年間、〈イエーナの栄光〉の第一フェーズの立役者は、ラインホルトとシラーであった。この時期、彼ら二人がイエーナの哲学部の看板教授であった」(1頁)。この二人の立役者のうち、ラインホルトは著者第1作目の主役である。同書の冒頭では、ラインホルトがウィーンを逃亡、紆余曲折を経てイエーナに辿り着くまでの人生経路がドラマティックに語られていた。それに対して本書は、『群盗』上演をめぐる一連の騒擾のなか、ヴェルテンベルクから逃亡するシラーの姿とともに、幕を開ける。いわば両書は一双をなして、一方ではウィーンから逃れイエーナに漂着した哲学者が、他方では同様の経緯からイエーナに辿り着いた詩人たちが主役なのである。そして、その「詩人たち」の原型ともいべきものがシラーなのであって、著者の言葉を借りるならば、カント哲学とのシラーの格闘——「美的感覚と哲学的精神」をもって「美の世界」と「学術の世界」を架橋するという「理想的企て」(本書26頁)——が、「ヘルダーリンや初期ロマン派の生育の土壌となった」(同頁)。

シラーを原型とする一種の思想的メタモルフォーゼ、それが本書全体の糸である。その糸が織りなす場、それがタイトルに言う「哲学的思惟と詩的思惟のインターフェイス」である。インターフェイス、すなわち異質な二つのシステムの境界面、交流域、共有部。本書を読み通せば、1790年代のイエーナという空間そのものが、こうしたインターフェイスであったことがわかるだろう。評者としてはさらに、二人の逃亡者、つまりラインホルトとシラーを結びつけるという、そんな大胆な詩的想像力に導かれつつ、同時に徹底的な哲学的考究を繰り広げる本書そのものに、詩と哲学のインターフェイスを認めたくもなる。